

編集後記

事の成るは 成る日に成るにあらず

専修大学社会体育研究所長

佐藤 雅幸

「事の成る日は 成る日に成るにあらず」この言葉は私の尊敬する、元アサヒビール会長の中条高德先生より頂いた言葉である。

弥生3月、梅の花がほころび始め、今年も専修大学社会体育研究所報の「あとがき」を書く季節になった。この時期は未曾有の災害をもたらした3.11東日本大震災を思い出す。震災から二年が経った今でも、まだまだ長期化する問題が山積している。一刻も早い復興を願いたい。

さて、今年度の社会体育研究所の活動を振り返ってみると、下記箇条書きの通り、例年を上回る積極的な活動をしてきた。

①佐藤満、久木留毅両研究員のロンドンオリンピック参加（日本チームのコーチおよびスタッフ）

②第5回スポーツレガシーシリーズシンポジウムの開催：「スポーツの力を考える～スポーツを通じた社会開発～」

③韓国研修会の実施：崇実大学におけるスポーツとITに関する取り組み、泰陵選手村施設見学および強化の取り組みについて

④2012年度「公益信託 タニタ健康体重基金」採諾：「行動変容ステージからみた体力向上プログラムの実践活動—大学による地域公開講座における子どもと高齢者を対象に—」

⑤株式会社バスクリンとの共同研究：「女子レスリング選手の入浴法とコンディショニングに関する実態調査」

⑥「専修大学社会体育研究所」から「専修大学スポーツ研究所」への名称変更

今回は、特筆すべき2つの活動にフォーカスし「あとがき」にしたい。

まずは、ロンドンオリンピックにおいて本研究所から2名の所員が参加した。ロンドンオリンピックにおける日本代表選手たちの活躍は、東日本大震災で被災に遭われた人々はもとより日本国民に感動や勇気そして希望を与えてくれた事はいままでもないが、選手たちにおいては、震災に立ち向かう人々の思いによって、選手自身が気づかされ、心のオーセンティック部分で揺るぎないモチベーションを与えてもらった。本研究所からは、日本レスリングチームの強化委員長として佐藤満教授が参加し、米満達弘選手を金メダリストに導いた。これは、御自身が獲得した1988年ソウルオリンピックから数えて24年ぶりであった。また久木留毅準教授は、日本選手団本部員・情報戦略スタッフとして日本選手団活躍の原動力となった。

特筆すべき2つ目は、本研究所の名称変更である。

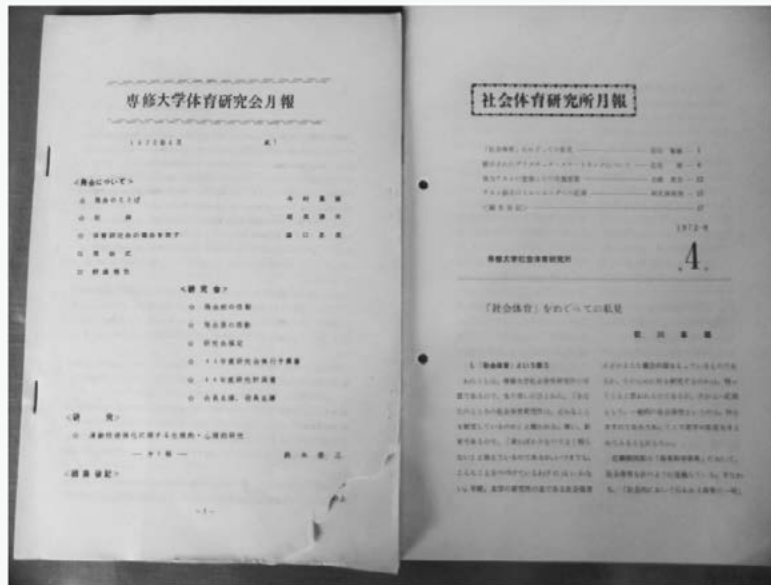
私の机上には、セピア色した1970年4月発行の専修大学体育研究会月報第1号が置かれている。それによれば、専修大学体育研究会発足式は、1969年7月5日 生田図書館会議室において、相馬勝男専修大学学長（当時）、森口忠造専修大学理事長（当時）ご臨席のもと盛大に開催されたと記されている。初代研究会会長を務められたのは、当時日本体育学会の重鎮であった今村嘉雄教授。発足式においては、相馬勝男学長、森口忠造理事長より、大学における体育教育および体

育研究において本研究所が果たす役割は非常に大きいと・・・という旨の言葉を賜った。

研究論文としては、鈴木啓三現名誉教授の「運動技術強化に関する生理的・心理的研究 第1報 —レスリング選手の減量に伴う心身の変化に関する実験的研究」が掲載された。

第2号は1971年1月の発行であり、「専修大学体育研究会月報」となっているが、3号（1972年4月）からは「専修大学社会体育研究所月報」と名称変更された。

編集後記によれば、専修大学体育研究会は5号館に研究施設を得たことにより研究所となり、当時の体育学会の重鎮、前川峰雄教授、江尻容教授を所員として迎えたのをきっかけに、「体育研究会」から「社会体育研究所」そして「体育研究所報」から「社会体育研究所報」と名称変更をしたと記されている。当時、社会体育という名称は我が国では、斬新なものだったようである。しかし、社会体育研究所月報第4号（1972年8月号）前川峰雄教授の「社会体育をめぐっての私見」として少々批判的な原稿が掲載されている。その中で、社会体育という概念について、「社会体育とは、社会内において行われる体育の一切：江橋慎四郎編著：体育科学辞典」という定義を引用して、これは極めて不明確な定義であると述べている。続けて、「社会体育」という場合、我が国では全体領域の中から、「学校体育」を除いた残りをさすという習慣がある。これは教育領域を学校教育と社会教育にわけようとするのと同じ考えである。



しかし、このような考えは便宜的なものであって、「学校外の体育」＝「社会体育」にとれば、根本的には社会は学校外のものとなり、これは明らかにおかしいことになる・・・(社会体育研究所月報第4号(1972年8月号)参照されたい)

この度、1972年から41年の時を経て、2013年4月より当研究所名を「社会体育研究所」から「スポーツ研究所」に改称することになった。

2011年、我が国におけるスポーツの根幹をなす「スポーツ振興法」が50年振りに改正され、「スポーツ基本法」が新しく施行された。これまでのものは、東京オリンピック(1964年開催)の3年前に施行されたものであり、時代の移り変わりとともに対応できなくなってきたことが大きな要因である。「スポーツ基本法」では、「Development of Sport」

から「Development through Sport」をキーセンテンスとして、スポーツを通して様々な社会の事象に対応していこうということが明確に示された。そこで、当研究所の名称にもなっている「社会体育」という概念が時代の変化にともない様々な分野において説明が難しくなってきたことも鑑みて、「社会体育研究所」から「スポーツ研究所」に改称することになった。

本研究所の名称変更にあたっては、学則変更にもあたるために日高学長・理事長および常勤監事会でのご理解をいただき、承認していただけることになった。心より感謝申し上げます。

世界の頂点に立とうとしているトップアスリートたちの姿を「下降するエスカレーターに乗りながら上に行こうとする状態」と表現する事がある。立ち止まっていれば必然的に

下降する。少しの努力では停滞する。下降する何倍もの速度で登って行かなければ頂上には行く事はできないのである。

本研究所のメンバーは、元アスリートであり、挑戦するスポーツ研究者の集団である。挑戦する者だけが評価される世界で生きている。

まさに「事の成るは 成る日に成るにあらざる」の精神がしみこんでいるメンバーである。

何も行動しないで物事が成る事はない。自らが考え実践する事で、事は成るのである。

最後に2013年4月よりスタートする「専修大学スポーツ研究所」の活動にご注目程、宜しく願い申し上げます。



専修大学社会体育研究所

佐藤 雅幸	齋藤 実
野呂 進	平田 大輔
吉田 清司	時任真一郎
佐竹 弘靖	渡辺 英次
佐藤 満	富川 理充
飯田 義明	相澤 勝治
久木留 毅	李 宇諤

専修大学社会体育研究所報 2012

平成 25 年 3 月 31 日
 発行者 佐藤 雅幸
 発行所 専修大学社会体育研究所
 〒 214-8580 神奈川県川崎市多摩区東三田 2-1-1
 電話・ファクシミリ 044-911-1032
 E-Mail sports@isc.senshu-u.ac.jp

デザイン 山岸淳デザイン(株)